

天地は一体なり

園長 児嶋 草次郎

一昨年の台風で倒れ、直径30cmほどの幹を地上3mほどの所で切り、起こして支柱で支えていたコブシの木が、2年ぶりに純白の清廉（せいれん）な花を数輪つけてくれました。切り口は痛々しくはありますが、その周辺からヒコバエのように芽が出て枝を伸ばし、花をつけてくれたのです。まさに再生です。この木は春の到来を感じさせ、気持ちを引き締め直すには今後もぜひとも私たち人間と共生してほしい大事な友愛園のシンボルであり、今年はずっとたくましく技を伸ばしてほしいと願っています。

この数年、大自然から人間に対する逆襲とも言えるような出来事が、世界各地で次々に起きています。地震、津波、台風、大雨等が、日本各地で人間社会に被害をもたらしています。私たち人間は勝手に文明の発展を謳歌しているけど、地球は一つの生き物であり、地球の肌あるいは息吹とも言える大自然の前では人間はほぼ無力なのだとつくづく感じさせられるこの数年です。

今回の新型コロナウイルスの猛威の前でも、人間たちはたじろくしかありません。昨年12月に中国の湖北省武漢市に始まったこの感染症が、今や世界各地に広がり、10万人以上の方々が罹患（りかん）し、すでに3500人以上が亡くなったとか。日本には2か月くらい前に侵入し、戦々恐々としていましたら、宮崎県内でもいよいよ3月4日に患者が出ました。『東京オリンピックがつぶれたらどうしよう』。東京の偉い人たちは夜も眠れないのではないのでしょうか。それにしても3500人以上が乗っている大型豪華客船の中で、この新型コロナウイルスが拡散していくなんてことは、だれも想定しなかったことなのでしょう。経済効率は上がるのかもしれませんが、そもそもこのような巨大な客船を作ることが自然の摂理に合うのか、政府の狼狽ぶりを見ていると考えさせられました。アメリカの方でも同じような客船で集団感染がおこりつつあるようです。3000人以上の人たちを一度に収容できるような病院はどこにもないのでしょうか。

「人は自然を開墾し、自然は人を開拓す」。この言葉は石井十次日誌の中に出て来た言葉です。田舎人のひがみと取られるのかもしれませんが、私たちはこの宮崎の田舎で、文明の誘惑に流されることなく、自然との共生生活を続けたいと、あらためて思っております。

ところで、今回は、新生石井記念のゆり保育園（正式名称は幼保連携型石井記念のゆり幼児園）のスタートにあたって、私の願い、思い等をここに書き記しておきたいと思います。3月末の完成に向けて現在突貫工事がおこなわれているところですが、凜然（りんぜん）とした牢固（ろうこ）な姿を中原運動公園の一画に現出しています。屋根は緑青色の鋼板葺（ふき）、壁は漆喰（しっくい）をイメージして白一色、そして腰回りになまこ壁。屋内も今までの保育園でやったような暖色系・原色系を避けて、静謐（せいひつ）で質素な木と紙の和の雰囲気。なぜこのような伝統的な日本の文化の様式にこだわろうとしたのか。

石井記念友愛社は、敗戦後昭和20年からスタートしました。このゆり保育園は昭和33年、主にこの周辺に独立された岡山孤児院関係者たちの御子孫を守るために開設されています。それから61年の年月がすぎています。今は、その自然環境や文化に魅力を感じてか、ほぼ地域外の子供たち

が通ってきます。この大自然の林や森の中を探検し基地を作ったり、ひつじを飼ってその毛で織物をしたり、田んぼや畑で稲や野菜を作ったり、日本の伝統文化である太鼓を習ったり、のゆり保育園なりの文化を築いて来ました。

それに自己満足することなく、この移転改築を機に、もっと岡山孤児院・石井十次の文化に帰りたい、その思いが、この建物のイメージを決めたのです。具体的にはどのような文化・教育になるのでしょうか。

ほぼ毎日、その写真を見ているのに、その真実を見ていない。そのようなことが現実にあります。私は70年以上この世界で生きて来ました、今ようやく気付かされていることがあります。皆さんも知っている、石井十次の「ライオン教育」の写真です。石井十次が卒業間近の少年と対座しているもので、「密室教育」と呼んだりしています。そのバックの中央に藤島武二の「ライオン教育」の絵が掲げてあります。この写真については、来訪者に対して私なりの解釈により何度も説明をして来ました。問題はその絵の両側に張ってある日本地図と世界地図をどう説明するかということです。私は、「日本、世界を視野に入れて生きていけと石井十次先生がこの少年に語りかけている」と解説して来ました。先ほどの「写真を見ているのに、その真実を見ていない」とはどういうことなのか。

最近、石井十次が明治27年に日誌に書き記した「帰国途上の所感」とこの写真がつながって来たのです。28歳の石井十次は、次のように謳（うた）っています。

アア美なるかな日向の地、予は実に爾（なんじ）を愛す。アア壮なるかな太平洋、予は実に爾を愛す。人間は其の境遇に由って教育せらるるものとせば、爾高鍋よ爾は予が理想的人物を養成するにおいて最も適當のところ也、アア美なるかな尾鈴山、アア壮なるかな太平洋（一部略）。

これは、石井十次が理想に燃え、岡山から宮崎に一時帰省する時に船上において自分の日記に書きとめた言葉です。感じるのは、彼の魂は解き放たれ船上から空へ飛び、尾鈴山、太平洋そして日向の大地を見渡しているということ。つまり鳥瞰（ちょうかん）的視野で世界を見ているということ。そういう天分を彼は持っていたということに、お恥ずかしながら最近気付かされたのです。

今回の友愛通信の表題「天地は一体なり」もそういう感性から生み出された言葉でしょう。明治44年（45歳）の日誌に次のように書いています。

「天地は一体なり、一人本気になれば、自ら全世界に響く、妙なるかな」（1月5日）。

彼はインスピレーションという言葉を度々使いますが、その時は、魂を解放し鳥の目になって世界を見つめているのでしょうか。

ここで、先ほどの日本地図、世界地図の話です。今まで「昔、小学校か中学校の図書室かどこかに日本地図、世界地図が張ってあったな、だからこの写真の中にも、一つの『知識教育』として張ってあるのだろう。」そういうレベルの理解でしかなかったのです。解釈は常識の域を越えることができませんでした。

『鳥瞰的な感性で世界をとらえる目と志を養う』。

石井十次はそういう目的で日本地図と世界地図を掲示したに違いありません。

ここで本題にもどります。岡山孤児院・石井十次の文化に帰るとは、まず、鳥瞰的感性を養う教育を取り入れていくということ。岡山孤児院時代、石井十次は、昼間の義務教育としての小学校はもちろんですが、夜間に英語学校を設置し、岡山孤児院の志の高い少年たちに英語を教えています。ですから明治時代でも、アメリカに留学したり就職して行く院生が何人もいたのです。まさにグローバル教育です。旅行教育も「鳥の目」的感性を養うには重要な教育でした。

現代は飛行機がありますので、大した苦勞もなく外国へ行ける時代となっています。英語のできる若者が外国に出て、日本文化への無知と狭い視野を指摘されて恥をかくなんてことはよく聞く話です。小手先の会話力しか身につけていないわけです。鳥瞰的視野に会話力が附随した時、真の国際人と言えるのでしょうか。

農業においても世界を相手に戦って行かねばならない時代です。畜産・農産物の売りつけに、一人ででも外国に行って交渉のできる人材に養成しなければならぬ時代でしょう。その地盤を新生のゆり幼稚園で作ることができればと思います。3歳未満時代はしっかりと愛情を注ぐことが大事ですが、4歳5歳時代になったら、英語の素養を身につけ、森の中で探検ごっこをしながらも、世界地図を常にみながら鳥瞰的感性をも身につけていく、そんな教育をめざしたいと願っています。中国湖北省武漢がどこにあるのか、保育士が指でさし示しながら、話をしている姿を私はイメージしています。

もう一つ、やらねばならないことがあります。「天は父なり、人は同胞なれば、互いに信じ相愛すべきこと」の「天」を意識する教育です。価値観も多様化し、一つの宗教を押しつけることは許されない時代となっておりますが、人間を超越した存在があり、人間がこの世界や大自然をコントロールできるわけではないという感性を身につけることは大事なことはないかと思えます。そういう感性があって初めて、大自然への感謝の気持ちも湧いて来ます。

2018年3月の「ゆうあい通信」で、「古戦場跡 20K を歩く」という題で、「九州の関ヶ原の戦い」と言われる、二つの戦いについて書かせていただきました。1578年の豊後（大分）の大友宗麟と薩摩（鹿児島）の島津義久との戦い（高城川合戦）と、それから9年後の1587年の薩摩の島津義久と豊臣秀吉（来たのは弟の羽柴秀長）との戦いです。特に後の戦いはまさに天下分け目の戦いで、この友愛園の目の前で、何万もの軍勢が死闘を繰広げました（根白坂合戦）。今から430年から440年くらい前の話です。

前の戦いは島津が勝ち、後の戦いはもちろん豊臣が勝っています。この戦いで豊臣が負けていたら、日本の歴史は大きく変わっていたのです。この戦いで多くの若者たちの命が失われました。高城川合戦でなくなった人は4000人とも7000人とも言われています。勝者の島津義久は、300人の僧を集めて供養したとか。その供養塔のある川南大地の宗麟原供養塔まで私たちは20Kハイキングで歩いたのです

問題は後の戦いです。前の戦いが大友3万対島津4万でしたが、後の方は豊臣10万対島津2万です。木城町が根白坂跡地に立てている案内板には、「三百人程の犠牲者」としか書いてありません。私の想像ではやはり数千人の若者たちが命を落としている。問題というのは、その死者たちを誰が弔ったかということ。島津は負けて鹿児島に引き上げ、代りにこの地を治めるようになったのは、やはり豊臣に負けて福岡から移封された秋月氏でした。秋月氏にこれらの死者を弔う義理はありません。

私はこの「ゆうあい通信」の中で、石井十次がこの戦いについて知っていてその地の上に理想郷を作ろうとしたのだとすれば、次元を越えた最大の供養となります、と書きました。そして最後に、「石井十次の理想郷の地盤に、400 数十年前の若者たちの夢や思いが埋まっていることにも心を寄せ、またその大地を守っていることに気概と誇りを持ち、彼らを供養する場を設けること」と結びました。

ちょうどのゆり幼稚園が建っている所は、よく湧水の出る場所であり、豊臣方の陣地があったに違いありません。工事中二階に登ってみると、南側のベランダから旧薩摩街道（石井十次は「サツマ往還」と呼びました）とその周辺が一望できます。まさに当時の島津の陣地が見渡せる館となっ

ています。もしかしたら、ここに高い矢倉を組んでいたのかもしれない。

これらの歴史的事実を子供たちの教育に生かす使命を私たちは背負っているということにも、最近気付かされています。時を越えて、何百何千という当時の若者たちの尊い魂に思いを馳せながら、今この平和な時代に生かされていることに感謝し、それぞれ自分たちの現代における「天命」を考える、そんな雰囲気醸成できたらと願います。石井十次が少年時代、挫折から抜け出すことができたのは、「天」の存在について、医師の荻原百々平（おぎわらどどへい）氏から暗示を受けることができたからでした。

4月1日より、石井記念のゆり保育園は、幼保連携型石井記念のゆり幼児園として再スタートします。幼稚園の機能を持つようになりますので、友愛園の幼児さんたちも通うことができるようになります。長年の宿願がようやく果たせます。また、木城町という枠を越えて、高鍋町西都市からもこの幼稚部に通うことができるようになります。皆様方の御支援・御協力、よろしくお願ひ致します。

